

——ウエイクアップ
目覚めよ。

頭の中に響く声に促されて、僕の意識は覚醒した。

「……おい、聴いているのか、実験体㉓！」

男の罵声。近い。それに狭いな。車の中か。外は雨が降っているようだ。

「もうすぐ、お前を收容する新しい施設おうちに着く。寝るんじゃねえぞ」

やたらと高圧的な男の声。当然か。僕は今、全身を拘束されて身動きが取れないでいる。目隠しも口枷もされていて、聴覚以外の情報は手に入れることができない。反撃できない相手に対して、人間は精神的優位をとる。目の前にいる(であろう)男もそうなっているのだ。座席が上下するのに合わせて、僕の体も上下に跳ねる。

「動くんじゃねえ。目障りだ」

男はそう言うってくるが、僕としては身動きが取れないのだから仕方ないだろう。突如、キイイイ、と擦過音が響いた。

今度は上下じゃない、前に向かって僕の体が動く。慣性の法則。車が急ブレーキをかけたのだ。側頭部を床に打ち付けられてしまう。

「痛え。何が起こった！」

男が僕の言葉を代弁してくれる。起き上がった男は車から出ていったようだ。僕を起こしてから行け、と言いたかったが口枷によって阻まれた。

取り残された僕は身体を左右に動かして拘束を解こうと試みる。駄目か。外せそうにない。車の外でパン、パン、パンと銃声が三回響いた。

ドアが開く。誰かが車内に入ってきた。さっきまで一緒だった男の足音じゃない。殺されるのか、と身構える僕だったが、予想外の事が行われた。拘束具が外されていく。頭に被されていた袋を剥がされて、目隠しも外された。

琥珀色の瞳が僕を見下ろす。黒髪色白の男性の顔が視界に映る。

「君が実験体㉓かい？ それとも第一魔王かい？」

琥珀色の瞳の男は、拘束具を外してくれた。僕の手を引いて別の車に誘導する。僕が座席に座ると、車は発進した。

車内には僕と男以外の人間もいる。運転手を含めて四人。全員女性だ。
「これで体を拭きたまえ」

琥珀色の男がタオルを差し出してきた。ありがたく受け取って雨で濡れた顔を拭く。

「あの、あなたの名前はなんですか？」

男は少し驚いたように眉を動かして、すぐに元の表情に戻った。

「どうせ後で自己紹介をすることになると思うがいいだろう。【デンドロビウム・レガリア】の団長、アンバーだ」

握手を求められる。断るのは失礼だと思ったのでアンバーの右手を握り返した。貸してもらったタオルを返して、僕はもう一度、質問をする。

「この車はどこに向かっているんですか？」

アンバーは快く答えてくれる。

「僕達のホーム、『デンドロビウム城』さ」

「あなたが新しい子ね」

デンドロビウム城に着いた僕達は、小さな女の子に迎えられてお城の中に入った。この人がデンドロビウム。アンバーさん達が仕えているお姫様らしい。

車に乗っていたメンバーの内、僕とアンバー以外が廊下の途中で別れた。

僕達はお姫様と一緒に行動した。リビングで二人掛けのソファに腰かける。外の空気で冷たくなった僕の体を、暖炉の火が温めてくれた。

僕は左腕の長袖の袖を捲る。

「何をしているの？」

お姫様も僕の隣に腰を下ろした。僕の行動を見て、お姫様は首を傾げている。

「血液検査とかしやさいように準備しておいた方がいいと思って」

お姫さまが手を伸ばす。小さな手のひらで僕の額を触った。

「うんっ、平熱」

手のひらが離れていく。検査はしないのだろうか。

「あなたの名前を教えてください」

お姫様の質問に、僕は答える。

「実験体々とか、第一魔王とか、呼ばれたことはありません」

「かーわーいーくーなーいっ！」

やだやだやだそんな名前、と怒るお姫様。どうすることもできず僕は困ってしまふ。助け船を出してくれたのはアンバーだった。

「デンドロビウム、彼は記憶喪失中らしいんだ。あまり困らせないであげたまえ」

「でも、実験体々とか、第一魔王とか呼びたくないもん」

「確かに、名前としては使いにくいかもしれないね。デンドロビウムが付けてあげたらどうだい」

「あはっ、それ名案」

お姫様が背伸びをして僕の顔を覗き込む。

「あなたは真っ赤な瞳めをしているから、ルージュくん」

「下の名前も考えてあげた方がいいんじゃないかい」

アンバーの言葉を受けてお姫様もう一度考え始めた。今度は顔を下げた。「うんうん」と悩んでいる。

名前、か。

自分の名前を他人に決められるのは不思議なものだ。いや、名前とは本来そういうものか。「……ヒーロー」

無意識的に、僕の口から言葉が零れ落ちていた。

二人の視線が僕の方へと集中する。取り繕うように

「その……昔、誰かにそう呼ばれたことがあるんです。詳しいことは思い出せませんが」

「ルージュ・ヒーロー。僕はいい名前だと思うよ」

「ルージュ君は今日からあたしの家来だから。あたしの言うことを聴いて、あたしを喜ばせるために行動して」

僕は初めての名前を貰った。お姫様の家来になった。

お姫様から解放された僕は、リビングを出て廊下を歩いていた。

デンドロビウム城。お姫様が生活している居城だけあって、照明器具一つとっても豪華だ。廊下には扉がいくつも並んでいる。家来の人達用の部屋だろうか。勝手に入るわけにはいかない。

廊下を歩いていると終点に着いた。正確に言うとバルコニーに辿り着いた。扉を開けて外に出る。

雨が上がっていた。しかし空気が濡れていて肌寒い。

雲の切れ目から月明かりが差し込む。

人がいた。ドレスを着た女性。バルコニーの中央で、広い髪が宙を泳ぐ。武術の訓練をしているのか。僕は話しかけた。

「こんな夜遅いのに一人で訓練をしているんですか」

声をかけた後で目の前の人物について思い出した。アンバーと一緒に車に乗っていた内

の一人だ。動きを止めた女性は僕の顔を見る。

「私は眠らなくていいから。強くなるために時間を無駄にしたくない」

「僕はルージュといます。ついさっきお姫様に付けてもらった名前なんですよ」

「私はエーデルワイス」

月明かりを背にしたこの人はとても綺麗に見えた。お姫様とはまた異なった美しさのベクトルだ。

「エーデルワイスさんはどうして強くなりたいんですか？」

「……私は強くないといけないから。魔王を全員殺すために」

魔王、か。

強く吹いた冷たい風に、僕の体は寒気を覚えた。

「ルージュ君、あたしとデートをするわよ」

朝になって朝食が並ぶテーブルに着いた僕は、お姫様にこう言われた。服を引っ張られて立ち上がった僕は、お姫様に連れられて食卓を後にした。朝食は食べることができなかった。

お姫様と一緒に公園に向かったのはいいんだけど。

「……迷子になってしまった」

木製のベンチに腰かけて、僕はため息をつく。

お姫様から目を離れた隙に、あっという間に逸れてしまった。

しばらくお姫様を探してみたが、初めて訪れる公園だ。土地勘のない僕が見つけれられるはずがない。

今は捜索を諦めて、こうしてベンチで休んでいる。

「君も家族とはぐれてしまったのかい？」

「なのですか？」

と首を傾けたのはとても幼い男の子(？)。男の子はちょこんと僕の隣に座っている。？を付けたのは、外見では男の子か女の子か分からないくらい可愛らしい顔をしているからだ。おそらく二歳か三歳くらいだと思う。今は暫定的に男の子としている。

男の子は青い髪と青い瞳で僕を見上げると、すぐに前へと向き直した。

周囲にこの子の親らしき人影はない。男の子は教えてくれないが、僕と同じように家族とはぐれてしまったのだろう。さながら、僕達は迷子仲間といったところか。

僕はポケットから未開封のペットボトルを出して蓋を開けた。そして、男の子に差し出す。4

「君も水分補給した方がいいよ」

「ありがとうございます」

小さな両手で受け取った男の子は、これまた小さな唇でペットボトルに口を付けた。中に入っている水を飲んでいく。

さて、ペットボトルを返してもらったら移動しよう。この子連れでお姫様を捜しに行くか。幼子をこの場に置いていくのは忍びない。

「お母さまの声なのです！」

ペットボトルを手にしたまま、男の子はベンチから飛び降りた。

いや、声ってなにも聞こえなかったけど。僕は頭を左右に振る。周りに人はいない。

男の子は駆け出した。そっちは男の子より大きな茂みがある。まずいって。

声をかける間もなく、男の子は茂みの中に入ってしまった。僕も茂みに入って男の子を追いかける。

顔に当たる草を防ぐために腕で顔を覆った。前が見えない。背の高い草木に囲まれて暗い。

「お母さま！」

「デルちゃん！」

「ルージュ君！」

三つの声が聞こえた。

日の光が視界に差し込む。茂みから抜け出た僕は腕を解放した。先程まで一緒にいた男の子が、同じ青髪の女性に抱えられている。

「お母さま。お母さま」

「もう、デルちゃん。ママから離れちゃ駄目」

どうやら男の子は家族と再会することができたらしい。胸に顔を埋めて喜んでいる。そして、僕も。

「ルージュ君が茂みから出てきた。びっくりね」

「お姫様。見つかってよかった」

青髪の女性の隣にお姫様が立っていた。

「……二人は知り合いだったんですか？」

お姫様から青髪の女性と男の子について教えてもらった。

予想通り、三人は知り合いだったらしい。

青髪の女性は、お姫様とは異なる国の女王様。アイリス・ステイメン。この人が男の子の母親だと一目でわかった。なんというか、この子が大人になったらこんな感じになるんだろ
うな、と想像できてしまうのだ。

男の子は女王様の子供、つまり王子様だ。

「デルちゃん、お兄ちゃんにお礼言おうか」

「ありがとうございます」

そして、男の子に渡していたペットボトルを返してくれた。

「どういたしまして」

その後、僕とお姫様は女王様に誘われて一緒に行動することにした。石畳の歩道を歩いて、公園の奥へと進んでいく。木々に閉ざされた少し暗くて冷たい場所に、それは置いてあった。

「これは……」

石碑だ。高さ二・五メートルの平たい大石に無数の文字の羅列が刻まれている。ただの魔
時の羅列じゃない。名前だ。夥しい数の人の名前が刻まれている。

女王様が石碑に近付いて右手を伸ばした。

「ちょうど一年前、アイルランドで第一魔王が引き起こした『大災禍』メイルストロムに巻き込まれて、

島にいた六三八万六六一人がその命を終えた。この子の父親もその時、アイルランドにいた」

第一魔王……？ それに王子様の父親って、女王様の旦那のことか。

「アイルランドは封鎖されて今も立ち入り禁止になっている」

——大英雄ヒーロー、ジークフリート・ステイメン、安らかに眠る。

女王様の視線の先には、こう刻まれていた。

「あの人はここに眠っていないけれど、この子の成長を伝えることができるのはこの場所

しかないから。私はこうやって訪れているの」

女王様の青い瞳が潤んでいる。その顔を見たのか見ていないのか、胸の辺りで抱えられている王子様も悲しい顔をした。

「パパ、きらい」

「もう、デルちゃんそういうこと言わないで。あの世でパパが悲しんじゃう」

僕は隣に立っているお姫様に質問をした。

「お姫様、魔王ってなんですか」

「……それは、あなたの方がよく知っているはずよ」

それから、石畳の歩道を戻った僕達は人で賑わう広場に着いた。噴水とベンチが置かれている。子供連れの家族が多い。公園の広場にしては珍しく、屋台も出ているようだ。

お姫様が一つの屋台に指を伸ばした。

「ルージュ君、あたしソフトクリームが食べたいな」

お姫様が示した屋台は十組ほどの客が列を作っている。お姫様達を列に並ばせるのは申し訳ないと思った僕は、お使いを引き受けることにした。

「分かりました。買ってきます」

「あら。私も頼もうかしら」

女王様にもお使いを頼まれた。

「ぼくが選ぶのです」

女王様の腕に抱かれている王子様が跳びはねた。こちらに向かって落ちてくる王子様を僕は胸で受け止める。取り落とさないよう、咄嗟に両腕で捕まえた。

「一緒に行こうか」

「うん！」

お姫様達に近くのベンチで待ってもらって、僕と王子様は列の最後尾に並んだ。

「どの味にしようか」

「ブルーベリー！」

「あはは、お姫様達の方も選ばないといけないね」

列に並ぶ前に聞いてくればよかったか、と思考したが、あのお姫様なら「ルージュ君が選んだものをあたしは食べたいな」と言いそうだ。僕が選ぶことにしよう。

行列が半分ほど消化された頃だった。

広場の中央から女の人の声が響いた。女の人。そう、お姫様だ。

「ルージュ君、助けてー！」

僕は振り返る。

目に映ったのは、お姫様と女王様が数名の暴漢に絡まれている光景だった。

「お母様！」

王子様が僕の腕から飛び降りて駆け出した。いや、まず行って。あいつら武器みたいなも

のを持っているし、男の子まで危険な目に遭ってしまおう。

「……っ！」

王子様の後を追うように、僕も走り出した。

王子様を追い抜いて、お姫様達から暴漢を引き剥がす。僕にできるのか。そういうことを考えていると。

パン、と。

銃声が響いた。

「ルージュ君っ！」

お姫様が叫び声を上げた。

僕は走行を止める。止めてしまったというべきだろうか。体が重い。次第に、立っていられなくなって、石畳の上に倒れ込んだ。

顔を上げると、一人の暴漢が拳銃をこちらに向けているのが見えた。自分が胸を撃たれたということを理解したのはその時だった。

俺が僕の意志に反発して勝手に下がってくる。

自分の呼吸の音を耳にしながら、僕の意識が暗黒に落ちた。

少女が僕を見下ろしていた。

アスファルトの地面に倒れ伏せる僕を、穴が開いたような黒い瞳で見下ろしている。

ここは、公園の広場じゃない。どこだ。そうか。アイルランド。一年前、第一魔王が『大災禍』ストロメールを引き起こして六三八万六六一人を殺戮した場所だ。

目の前にいる少女からおよそ生気と呼べるものを感じられない。おそらく第一魔王によって殺された六三八万六六一人の内の一人なのだろう。

いや、その表現も正しくないのか。

第一魔王に殺された六三八万六六一人分の意志の代表が彼女なのだ。

少女の頭上に瓦礫が現れる。穴が開いたように黒い瞳で僕を見下ろす少女の幻影は瓦礫に押し潰されて姿を消した。

次に現れたのは男だった。青い瞳と青い髪の大男。

この人物と出会った時も、僕は今と同じように地面に倒れ込んでいた。

——俺は大英雄^{ヒーロー}、ジークフリート・ステイメン。第一魔王^{まえ}を殺すためにここに来た。

大剣の切っ先をこちらに向ける男と、僕は戦い、そして殺した。

……全て、思い出した。

僕は第一魔王だ。アイルランドで『大災禍』を引き起こし、六三八万六六一人を殺した極悪人だ。

アイルランド人の少女が黒い眼差しで語る。お前は生きてはいけけない大罪人だと。

青髪青眼の男が言う。お前のせいで不幸になった者がいると。

僕は二人の言葉を受け入れた。言い訳のしようがない。彼らの言うことは尤もだ。だけども。

「——だけど、助けを求める人がいるんだ。助けなくちゃいけない人たちがいるんだ！」
助けを求めるお姫様の姿。

そして、僕は立ち上がり叫んだ。

「僕に力を貸せ！」

——いいよ。

女の子の声が聞こえた気がした。目の前の少女が僕に向かって微笑んだ。

僕の意識が公園の広場に戻る。

暴漢に襲われているお姫様と女王様。そして今まさに巻き込まれようとしている王子様。這いつくばっていた石畳の地面から起き上がり、僕は声を発した。

「変身ッ！」
ウエイクアッブ